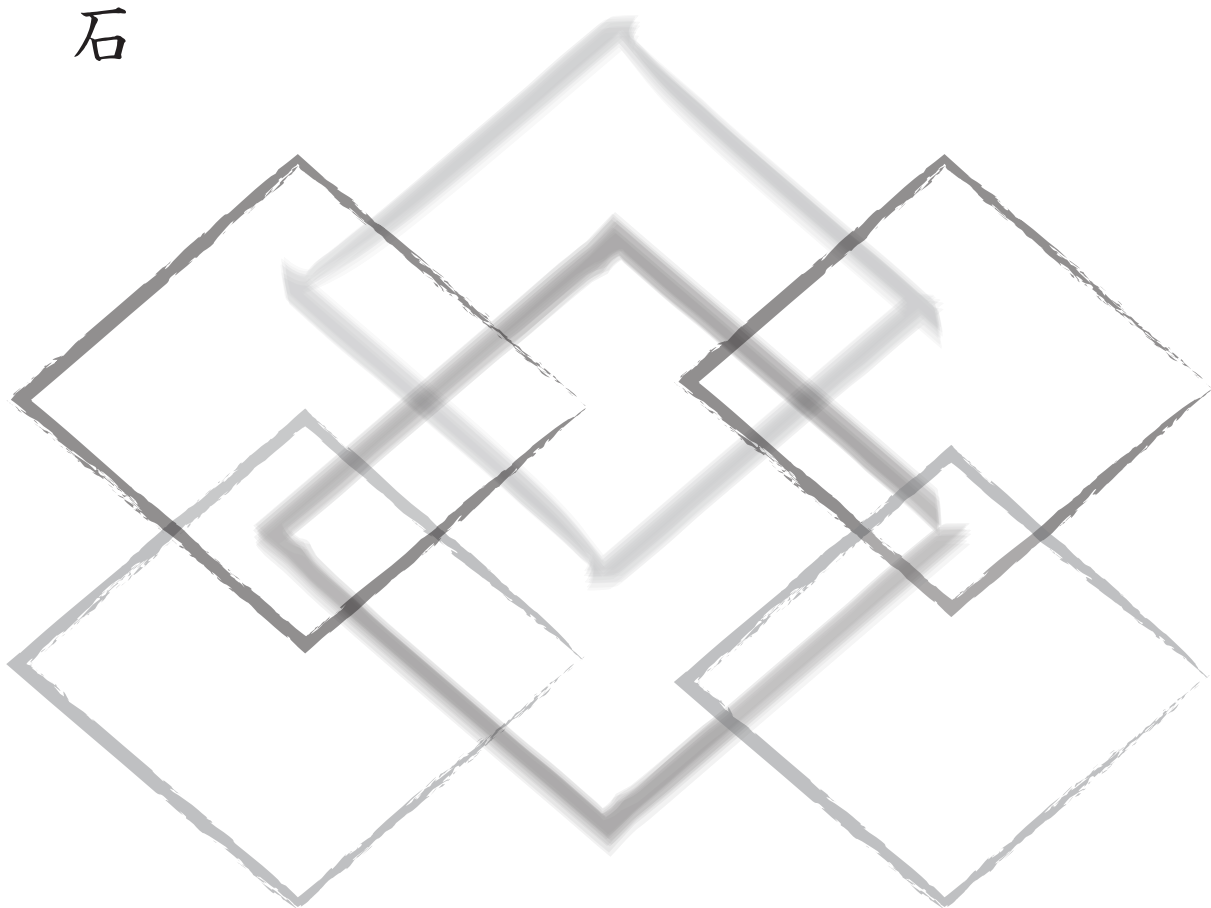


# 文鳥

夏目漱石



一冊堂青空文庫



## 文鳥

### 夏目漱石

十月早稲田わせだに移る。伽藍がらんのような書齋にただ一人、片づけた顔を頬ほ杖づえで支えていると、三重吉みえきちが来て、鳥を御飼かいなさいと云う。飼つてもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼うのかねと聞いたら、文鳥ぶんちようですと云う返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから奇麗きれいな鳥に違なからうと思つて、じゃ買つてくれたまゑと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼いなさいと、同じような事を繰り返している。うむ買うよ買うよとやはり頬杖を突いたままで、むにゃむにゃ云つてるうちに三重吉は

黙ってしまった。おおかた頬杖に愛想を尽かしたんだろうと、この時始めて気がついた。

すると三分ばかりして、今度は籠かごを御買いなさいと云いだした。これも宜よろしいと答えると、是非御買いなさいと念を押す代りに、鳥籠の講釈を始めた。その講釈はだいぶ込み入こいったものであつたが、氣の毒な事に、みんな忘れてしまった。ただ好いのは二十円ぐらいすると云う段になつて、急にそんな高価たかいのでなくつても善よかろうと云つておいた。三重吉はにやにやしている。

それから全体どこで買うのかと聞いて見ると、なにどこの鳥屋にでもありますと、実に平凡な答をした。籠はと聞き返すと、籠ですか、籠はその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲を攫つかむよ

うな寛大な事を云う。でも君あてがなくなつちやいけなかうと、あたかもいけないような顔をして見せたら、三重吉は頬ほっぺたへ手をあてて、何でも駒込に籠の名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんか、非常に心細くなつてしまった。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さつそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買ったか、七子ななこの三つ折みおれの紙入を懐中して、人の金でも自分の金でも悉しっかい皆この紙入の中に入る癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入の底へ押し込んだのを目撃した。

かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠かごとは

容易にやって来ない。

そのうち秋が小春こはるになった。三重吉はたびたび来る。よく女の話などをして帰って行く。文鳥と籠の講釈は全く出ない。硝子戸ガラスどを透すかして五尺の縁側えんがわには日が好く当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据すえてやったら、文鳥も定めし鳴き善よからうと思うくらいであつた。

三重吉の小説によると、文鳥は千代ちよ千代と鳴くそうである。その鳴き声がだいぶん気に入ったと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚ほれていた事があるのかも知れない。しかし当人はいっこうそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜しもが降り出した。自分は毎日伽藍がらんのような書齋に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮していた。戸は二重にじゅうに締め切った。火鉢ひばちに炭ばかり継ついでいる。文鳥はついに忘れた。

ところへ三重吉が門口かどぐちから威勢よく這入はいつて来た。時は宵よいの口くちであつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳かざして、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になった。三重吉は豊隆ほうりゅうを従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重吉が大きな箱を兄あにき分ぶんに抱かかえている。五円札が文鳥と籠と箱になつたのはこの初冬はつふゆの晩であつた。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯ランプを

もつとこつちへ出せなどと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫色むらさきいろになつてゐる。

なるほど立派な籠ができた。台が漆で塗うるしつてある。竹は細く削けずつた上に、色が染っけてある。それで三円だと云う。安いなあ豊隆と云つてゐる。豊隆はうん安いと云つてゐる。自分は安いか高いか判然と判わからないが、まあ安いなあと云つてゐる。好いになると二十円もするそうですねと云う。二十円はこれで二返目にへんめである。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向ひなたへ出して曝さらしておくうちに黒味くろみが取れてだんだん朱しゅの色が出て来ますから、——そうしてこの竹は一返善いっぺんく煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈

夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗きれいでしようと云っている。

なるほど奇麗だ。次の間つぎへ籠かごを据えて四尺ばかりこつちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうずくまっていなければ鳥とは思えないほど白い。何だか寒そうだ。

寒いだろうねと聞いてみると、そのために箱を作ったんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠かごが二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々ぎようずい行水を使わせるのだと云う。これは少し手数てすうが掛るなと思っていると、それから糞ふんをして籠を汚よごしますから、時々掃除そうじをしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥のためにはなかなか強硬である。

それをはいいい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食わせなくっちゃいけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えつぼを出して殻からだけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実みのある粟を一々拾い出さなくっちゃなりませんから。水も毎朝かえておやんなさい。先生は寝坊だからちようど好いでしょうと大変文鳥に親切を極きわめている。そこで自分もよろしいと万事受合った。ところへ豊隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。こいういっさい万事を調ととのえておいて、実行を逼せまられると、義理にも文鳥の世話をしなければならなくなる。内心ではよほど覚束おぼつかなかったが、まづやってみようとまでは決心した。もしできなければ家うちのものが、どうかするだろうと思った。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀<sup>ていねい</sup>に箱の中へ入れて、縁側<sup>えんがわ</sup>へ持ち出して、ここへ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍<sup>がらん</sup>のような書齋の真中に床を展<sup>の</sup>べて冷<sup>ひや</sup>かに寝た。夢に文鳥を背負<sup>しよ</sup>い込<sup>こ</sup>んだ心持は、少し寒かつたが眠<sup>ねぶ</sup>つてみれば不<sup>ふ</sup>断<sup>だん</sup>の夜のごとく穩かである。

翌朝<sup>よくあさ</sup>眼が覚<sup>さ</sup>めると硝子戸<sup>ガラスど</sup>に日が射している。たちまち文鳥に餌<sup>え</sup>をやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが退儀<sup>たいぎ</sup>であつた。今にやろう、今にやろうと考えているうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顔を洗うついでをもつて、冷たい縁<sup>すあし</sup>を素足で踏みながら、箱の蓋<sup>ふた</sup>を取つて鳥籠を明海<sup>あかるみ</sup>へ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかつたら氣の毒になつた。

文鳥の眼は真黒である。瞼<sup>まぶた</sup>の周圍<sup>まわり</sup>に細い淡紅色<sup>ときいろ</sup>の絹糸を縫いつけた

ような筋<sup>すじ</sup>が入っている。眼をぱちつかせるたびに絹糸が急に寄って一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾<sup>かたぶ</sup>けながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据<sup>す</sup>えた。文鳥はぱつと留<sup>とま</sup>り木を離れた。そうしてまた留<sup>とま</sup>り木に乗った。留<sup>とま</sup>り木は二本ある。黒味がかつた青軸<sup>あおじく</sup>をほどよき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえ、た足を見るといかにも華奢<sup>きゃしゃ</sup>にできている。細長い薄紅<sup>うすくれない</sup>の端に真珠を削<sup>けず</sup>ったような爪が着いて、手頃な留<sup>とま</sup>り木を甘く抱<sup>うま</sup>え込<sup>こ</sup>んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥はすでに留<sup>とま</sup>り木の上で方向<sup>むき</sup>を換えていた。しきりに首を左右に傾<sup>かたぶ</sup>ける。傾けかけた首をふと持ち直して、

心持前へ伸のしたかと思つたら、白い羽根がまたちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗のぞき込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場ふろばへ行つた。歸りに台所へ廻つて、戸棚とだなを明けて、昨夕ゆうべ三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書斎の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕ゆうべ叮嚀ていねいに餌えをやる時の心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがつて、外から出口を塞ふさぐようにしなくては危険だ。餌壺えつぼを出す時も同じ心得でやらなければならない。とその手つきまでして見せた

が、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事ができるのか、つい聞いておかなかった。

自分はやむをえず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振り返った。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の処置に窮した。人の隙を窺<sup>すきうかが</sup>つて逃げるような鳥とも見えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏<sup>はばたき</sup>を始めた。細く削<sup>けず</sup>った竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶほどに翼<sup>つばさ</sup>を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭<sup>いや</sup>になった。粟<sup>あわ</sup>の壺と水の壺を留り木の間にようやく置くや否や、手を引き込みました。籠の戸ははたり

と自然ひとりに落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横なかに向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直まっすぐにして足の下もとにある栗と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間はたいてい机に向つて筆を握つていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事ができた。伽藍がらんのような書斎へは誰も這入はいつて来ない習慣であつた。筆の音に淋さびしさと云う意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がぴたりとやむ、またやめねばならぬ、折もだいぶあつた。その時は指の股またに筆を挟はさんだまま手の平ひらへ顎あごを載せて硝子越ガラス越しに吹き荒れた庭を眺めるのが癖くせであつた。それが済むと載せた顎を一応撮つまんで見る。それでも筆と紙がいつしよにならない

時は、撮んだ顎を二本の指で伸<sup>の</sup>して見る。すると縁側<sup>えんがわ</sup>で文鳥がたちまち千代<sup>ちよ</sup>千代と二声鳴いた。

筆を擱<sup>お</sup>いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留<sup>とま</sup>り木<sup>ぎ</sup>の上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代と云った。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思うほどな美<sup>い</sup>い声で千代と云った。三重吉は今に馴<sup>な</sup>れると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて歸つて行つた。

自分はまた籠<sup>そば</sup>の傍<sup>そば</sup>へしやがんだ。文鳥は膨<sup>ふく</sup>らんだ首を二三度豎横<sup>たてよこ</sup>に向<sup>む</sup>け直した。やがて一団<sup>ひとかたまり</sup>の白い体がぽいと留<sup>とど</sup>り木の上を抜け出した。と思うと奇麗<sup>きれい</sup>な足の爪が半分ほど餌壺<sup>えつぽ</sup>の縁<sup>ふち</sup>から後<sup>うしろ</sup>へ出た。小指を掛<sup>か</sup>けてもすぐ引<sup>ひ</sup>つ繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>りそうな餌壺は釣鐘<sup>つりがね</sup>のように静かである。さすが

に文鳥は軽いものだ。何だか淡雪あわゆきの精せいのような気がした。

文鳥はつと嘴くちばしを餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振つ

た。奇麗ならに平して入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零こぼれた。文鳥

は嘴くちばしを上げた。咽喉のどの所で微かすかな音がする。また嘴を粟の真中に落す。

また微な音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細こま

やかで、しかも非常に速すみやかである。堇すみれほどな小さい人が、黄金こがねの槌つちで

瑪瑙めのうの基石ごいしでもつづけ様に敲たたいているような気がする。

嘴くちばしの色を見ると紫むらさきを薄く混まぜた紅べにのようである。その紅がしだいに

流れて、粟あわをつつく口尖くちさきの辺あたりは白い。象牙ぞうげを半透明にした白さであ

る。この嘴が粟の中へ這はい入る時は非常に早い。左右に振り蒔まく粟の珠たま

も非常に軽そうだ。文鳥は身を逆さかさまにしないばかりに尖とがった嘴を黄

色い粒の中に刺し込んで、膨くらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分ほどだと思ふ。

自分はそつと書斎へ歸つて淋しくペンを紙の上に走らしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい口に受けた一雫を大事そうに、仰向いて呑み下している。この分では一杯の水が十日ぐらい続くだろうと思つてまた書斎へ歸つた。晩には箱へしまつてやった。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出

て、霜しもが降っていた。文鳥は箱の中でことりともしなかった。

明ある日ひもまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやったのは、やっぱり八時過ぎであつた。箱の中ではとうから目が覚さめていたんだらう。それでも文鳥はいっこう不平らしい顔もしなかった。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔むかし美しい女を知っていた。この女が机もたに凭たれて何か考えているところを、後うしろから、そつと行つて、紫の帶おび上げの房ふさになつた先を、長く垂くらして、頸筋くびすじの細いあたりを、上から撫なで廻まわしたら、女はものう気げに後を向いた。その時女の眉まゆは心持八の字に寄っていた。それで眼尻と口元には笑が萌きざんでいた。同時に恰好かっこうの好い頸を肩まですくめてい

た。文鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行った。自分が紫の帶上でいたずらをしたのは縁談のきまつた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。しかし殻もだいぶ混っていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁っていた。易えてやらなければならぬ。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにもかかわらず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥にすまないと思った。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯がどこかへ持つて行った。水も易えてやった。水道の水だから大変冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代

千代と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかった。

夜は箱へ入れた。明る朝目が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覚めているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手に取るさえ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろうと思ひながら、口から出る煙の行方を見つめていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔がちよつと見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ

出た。そうして箱の蓋ふたをはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら千代千代と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴なれるにしたがつて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉が傍そばにいさえすれば、しきりに千代千代と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌えを食べると云う。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

次の朝はまた怠なまけた。昔の女の顔もつい思い出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側えんがわへ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留とまり木ぎの上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸の

して籠の外を下の方から覗のぞいている。その様子がなかなか無邪気である。昔紫の帶上おびあげでいたずらをした女は襟えりの長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖くせがあつた。

栗あわはまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は栗も水も易かえずに書齋へ引込ひっこんだ。

昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動かたがた、五六間の廻り縁を、あるきながら書見するつもりであつた。ところが出て見ると栗がもう七分がた尽きている。水も全く濁つてしまった。書物を縁側へ抛ほうり出しておいて、急いで餌えと水を易えてやつた。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食うまでは縁側を覗かなかつた。書齋に帰ってから、あるいは昨日きのうのように、家人うちのものが籠

を出しておきはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出して見たら、はたして出してあつた。その上餌も水も新しくなっていた。自分はやつと安心して首を書斎に入れた。途端に文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込めた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。けげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めていた。自分はどうとう机の前に歸つた。

書斎の中では相変わらずペンの音がさらさらする。書きかけた小説はだいぶんはかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなつて、薩摩五徳に懸けた鉄瓶がほとんど冷めている。炭取は空だ。手を敲いたがちよつと台所まで聴えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上にじつと留っている。よく見ると足が一本しかな

い。自分は炭取を縁に置いて、上からごんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢きゃしゃな一本の細い足に総そう身を託たくして默然もくねんとして、籠の中に片づいている。

自分は不思議に思った。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であった。しばらく寒い縁側に立って眺めていたが、文鳥は動く気色けしきもない。音を立てないで見つめていると、文鳥は丸い眼をしだいに細くし出した。おおかた眠ねむたいのだろうと思って、そつと書斎へ這入ろうとして、一步足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開あいた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉ためて火鉢ひばちへ炭をついだ。

小説はしだいに忙いそがしくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなったような心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌えをやる水やる。籠かごの出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目のようになった。

それでも縁側えんがわへ出る時は、必ず籠の前へ立留たちどまつて文鳥の様子を見た。たいていは狭い籠を苦くにもしないで、二本の留り木を満足そうに往復していた。天氣の好い時は薄い日を硝子越ガラスごしに浴びて、しきりに鳴き立てていた。しかし三重吉の云ったように、自分の顔を見てことさらに鳴く気色はさらになかった。

自分の指からじかに餌えを食うなどと云う事は無論なかった。折々機きげ

嫌んのいい時は麵パン麩この粉こなどを人指指ひとさしゆびの先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥はけっして近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼つばさを乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二三度試みた後のち、自分は氣の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事のできるものがあるかどうかはなはだ疑わしい。おそらく古代の聖徒せいんとの仕事だろう。三重吉は嘘うそを吐いたに違ない。

或日の事、書齋で例のごとくペンの音を立てて侘わびしい事を書き連つらねていると、ふと妙な音きぬが耳に這入はいつた。縁側でさらさら、さらさら云う。女が長い衣きぬの裾すそを捌さばいているようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、あまりに仰山ぎやうさんである。雛段ひなだんをあるく、内裏だいりびな雛はなの袴はかまの

襷ひだの擦すれる音とでも形容したらよかろうと思った。自分は書きかけた小説をよそにして、ペンを持ったまま縁側へ出て見た。すると文鳥がぎようずい行水を使っていた。

水はちようど易かえ立たてであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛むなげまで浸ひたして、時々は白い翼つばさを左右にひろげながら、心持水入の中にしゃがむように腹を圧おしつけつつ、総身そうみの毛を一度に振ふっている。そうして水入の縁ふちにひよいと飛び上る。しばらくしてまた飛び込む。水入の直径は一寸五分ぐらいに過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、背は無論余る。水に浸つかるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然きんぜんとして行水ぎようずいを使っている。

自分は急に易籠かえかごを取って来た。そうして文鳥をこの方へ移した。そ

れから如露じよろを持って風呂場へ行つて、水道の水を汲くんで、籠の上からさあさあとかけてやった。如露じよろの水が尽きる頃には白い羽根から落ちる水が珠たまになつて転ころがつた。文鳥は絶えず眼をぱちぱちさせていた。

昔紫の帶上おびあげでいたずらをした女が、座敷で仕事をしていた時、裏二階から懷中鏡ふところかがみで女の顔へ春の光線を反射させて楽しんだ事がある。女は薄紅うすあかくなつた頬を上げて、纖ほそい手を額の前に翳かざしながら、不思議さうに瞬まばたきをした。この女とこの文鳥とはおそらく同じ心持だろう。

日数ひかずが立つにしたがつて文鳥は善よく囀さえずる。しかしよく忘れられる。或る時は餌壺えつぼが栗あわの殻からだけになつていた事がある。ある時は籠かごの底が糞ふんでいっぱいになつていた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越ガラスごしに差し込んで、広い縁側えんがわがほの明るく見え

るなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乗っていた。その隅に文鳥の体が薄白く浮いたまま留り木の上に、有るか無きかに思われた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやった。

翌日文鳥は例のごとく元気よく囀っていた。それから時々寒い夜も箱にしまつてやるのを忘れることがあった。ある晚いつもの通り書斎で専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆った音がした。しかし自分は立たなかった。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立つて行って、何でもないといまいまいから、気にかからないではなかったが、やはりちよつと聞耳を立てたまま知らぬ顔ですましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行ったついで、気がかりだから、念のため一応縁側へ廻って見る

と――

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水入みずいれも餌壺えつぼも引繰返ひっくりかえつてゐる。栗あわは一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに鳥籠の棧さんにかじりついてゐた。自分は明日あしたから誓つてこの縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日あくるひ文鳥は鳴かなかつた。栗を山盛やまもり入れてやつた。水を漲みなぎるほど入

れてやつた。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かなかつた。

午飯ひるめしを食つてから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二三行書き出す

と、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら栗も水もだいぶん減つてゐる。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日<sup>よくじつ</sup>文鳥がまた鳴かなくなった。留り木を下りて籠の底へ腹を圧<sup>お</sup>しつけていた。胸の所が少し膨<sup>ふく</sup>らんで、小さい毛が漣<sup>さざなみ</sup>のように乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれと云う手紙を受取った。十時までにと云う依頼であるから、文鳥をそのままにしておいて出た。三重吉に逢<sup>あ</sup>つて見ると例の件がいろいろ長くなつて、いっしょに午飯を食う。いっしょに晩飯<sup>ばんめし</sup>を食う。その上明日<sup>あす</sup>の会合まで約束して宅<sup>うち</sup>へ歸つた。歸つたのは夜の九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這<sup>はい</sup>入つて寝てしまつた。

翌日<sup>あくるひ</sup>眼が覚<sup>さ</sup>めるや否や、すぐ例の件を思いだした。いくら本人が承知<sup>ちやう</sup>だつて、そんな所へ嫁にやるのは行末<sup>ゆくすえ</sup>よくあるまい、まだ子供だか

らどこへでも行けと云われる所へ行く気になるんだろう。いったん行けばむやみに出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸に陥<sup>おちい</sup>って行く者がたくさんある。などと考えて楊枝<sup>ようじ</sup>を使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて行つた。

歸つたのは午後三時頃である。玄関<sup>かいとう</sup>へ外套<sup>かいとう</sup>を懸<sup>か</sup>けて廊下伝いに書齋へ這<sup>はい</sup>入るつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反<sup>そ</sup>つ繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>つていた。二本の足を硬<sup>そろ</sup>く揃<sup>そろ</sup>えて、胴と直線に伸ばしていた。自分は籠の傍<sup>わき</sup>に立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠<sup>ねむ</sup>つている。瞼<sup>まぶた</sup>の色は薄蒼<sup>うすあお</sup>く變つた。

餌<sup>えつぽ</sup>壺<sup>あわ</sup>には粟<sup>あわ</sup>の殻<sup>から</sup>ばかり溜<sup>たま</sup>つてゐる。啄<sup>つば</sup>むべきは一粒もない。水入は底の光るほど溷<sup>か</sup>れてゐる。西へ廻つた日が硝子戸<sup>ガラスど</sup>を洩れて斜めに籠に

落ちかかる。台に塗った漆は、三重吉の云ったごとく、いつの間にか黒味が脱けて、朱の色が出て来た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺めた。空になった餌壺を眺めた。空しく橋を渡している二本の留り木を眺めた。そうしてその下に横わる硬い文鳥を眺めた。

自分はこごんで両手に鳥籠を抱えた。そうして、書斎へ持って這入った。十畳の真中へ鳥籠を卸して、その前へかしまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握って見た。柔かい羽根は冷きつてゐる。

拳を籠から引き出して、握った手を開けると、文鳥は静に掌の上にゐる。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見つめていた。そ

れから、そつと座布団ざぶとんの上に卸した。そうして、烈はげしく手を鳴らした。

十六になる小女こおんなが、はいと云つて敷居しきいざわ際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握つて、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯向うつむいて畳を眺めたまま黙っている。自分は、餌えをやらないから、とうとう死んでしまったと云いながら、下女の顔を睥にらめつけた。下女はそれでも黙っている。

自分は机の方へ向き直つた。そうして三重吉へ端書はがきをかいた。「家うちの人が餌ものをやらないものだから、文鳥はとうとう死んでしまった。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌をやる義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」と云う文句であつた。

自分は、これを投函<sup>だ</sup>して来い、そうしてその鳥をそっちへ持って行けと下女に云った。下女は、どこへ持って参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持って行けと怒鳴<sup>どな</sup>りつけたら、驚いて台所の方へ持って行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋<sup>うめ</sup>るんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼<sup>にわ</sup>んだ植木屋が、御嬢さん、ここいらが好いでしょうと云っている。自分は進まぬながら、書斎でペンを動かしていた。

翌日<sup>よくじつ</sup>は何だか頭が重いので、十時頃になつてようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日<sup>きのう</sup>植木屋の声のしたあたりに、小さい公<sup>こう</sup>札<sup>さつ</sup>が、蒼<sup>あお</sup>い木賊<sup>とくさ</sup>の一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄<sup>にわげた</sup>を穿<sup>は</sup>いて、日影の霜<sup>しも</sup>を踏<sup>ふ</sup>み碎<sup>くだ</sup>いて、近づいて見ると、公

札の表には、この土手登るべからずとあった。筆子ふでこの手蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想かわいそうな事を致しましたとあるばかりで家人がうちのもの悪いとも残酷だともいっこう書いてなかった。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---